

# 「惟清道人帖」考証と解釈考\*

戴逢紅\*\*著 目黒静菜\*\*\*訳

## 要旨

惟清禪師は北宋の高僧であり、黄龍宗は彼の法脈から日本に伝えられ、明庵栄西は惟清から数えて第6代目の法孫となる。黄庭堅の「惟清道人帖」の持ち主は鄭郊であるが、そこに述べられていることはすべて惟清に関することである。黄庭堅の手紙は、筆跡が精巧で美しい以外に、内容もとても貴重である。：惟清が黄龍の住持を引き継ぐ重大な時期にさしあたり、張商英は彼に観音古寺の住持になるよう要請した。これにより生じた一連の複雑な人間関係と変事は……遙か昔のことであるため、大きな宗派の事件であるにもかかわらず、ほとんど歴史上の謎となっており、今なお論争を引き起こしている。本稿で筆者は、歴史的脈絡に当てはめ、事件の原因に遡り、人間関係を詳しく分析し、人物の心理を解析する。また、多くの歴史的事実に照らし、書の内容を考証、解釈し、誰が書の受取人なのか、観音寺はどこにあるのか、草庵を結んで一人暮らしした結末、惟清が住持になりたがらなかった原因や黄庭堅が書状を書いた目的などの一連の疑問への回答を明らかにした。

キーワード：黄龍宗 黄庭堅 惟清禪師 無尽居士 観音古寺

---

\*原題「《惟清道人帖》考釋」

\*\*作者紹介：戴逢紅、男、中国江西人、現在は江西師範大学歴史研究中心研究員。著書に『黄龍宗簡史』『黄龍宗禪師』『黄龍宗公案』等があり、『法音』『黄梅禪』等に発表論文が複数ある。

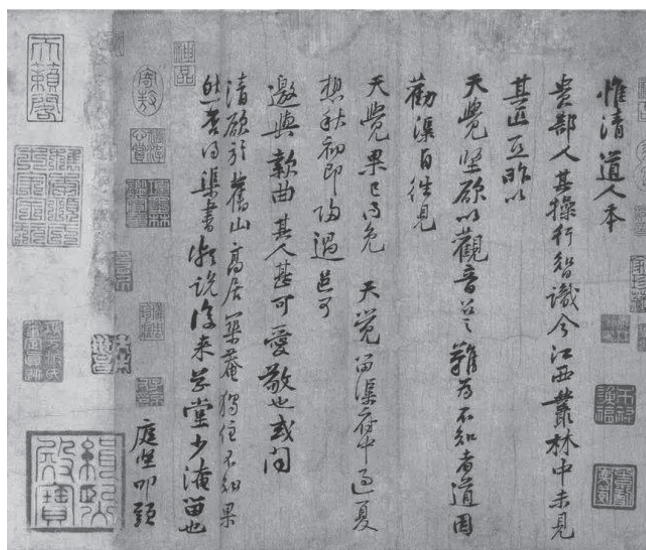
\*\*\*東京外国語大学大学院総合国際学研究所博士前期課程

詩・書において非常に優れ、蘇軾（1037—1101）と名声を等しくする黄庭堅（1045—1105）は、単に著名な文学者・書家・「江西詩派」の開祖であるだけでなく、黄龍宗の二祖、晦堂祖心禪師（1025—1100）の得法の弟子でもあり、その悟道の因縁は『嘉泰普灯録』『五灯会元』『続伝灯録』に見られる。このような特別な縁から、彼の数多くの書作品は、ただ芸術面において高踏的なだけでなく、宗門の人物関係にもかなり関係しており、書と禅宗史どちらにおいても非常に貴重である。現在、北京故宫博物館に所蔵されている「惟清道人帖」<sup>1</sup>はその典型例である。

この書は黄庭堅の真筆の一つで、現物は縦29.3センチメートル・横31.8センチメートル・全115字である。全編において、行間は広く、字は密、長い語句と短い語句を上手く配置することにより、高いところと低いところとが呼応する構造となる。奇数行の長さを変えており、端正かつ安定感があり隙がない。また、美しく整っており古風で雅やかである。際立って創意に満ち、韻律が自然に生まれている。このように、黄庭堅の行書の特色と風格を十分体現しており、歴代の書家やコレクターに珍重されてきた。書の一面には、「神游心賞」「項元汴氏審定真跡」「神品」「天頼閣」「緝熙殿宝」などといった全印22個と半印5個の鑑蔵印がある。乾隆帝はかつて「凌冬老幹、偃蹇岩壑」<sup>2</sup>と称賛した。現在、この賛の筆跡並びに「乾隆宸翰」の蔵印はめぐり取られてしまっている。しかし、『三希堂石渠宝笈法帖』の書籍の中では今なお確認することが出来る。

「惟清道人帖」はこれまで筆法によって世に知られており、その史学的価値については、遙か昔のことであるため、その業績はまれにしか見られず、ほとんど世に埋もれていた。書状全体をざっと見ると、たった数文で、百余字であるが、内容は黄龍宗・観音院・高居寺・惟清禪師（?—1117）・鄭郊（交）居士（生没年不詳）・張商英（天覺）（1044—1121）宰相など複雑な人物と事物に関連している。

惟清道人、本貴部人、其操行智識、今江西叢林中未見其匹亜。昨以天覺



欲以觀音召之、難為不知者道、因勸渠自往見天覺、果已得免。天覺留渠府中過夏、想秋初即歸、過邑可邀與款曲、其人甚可愛敬也。或問清欲于旧山高居筑庵独住、不知果然否？得渠書、頗說復來草堂少淹留也。庭堅叩頭。

以上は「惟清道人帖」の全文で、以下が現代語訳である。

惟清禪師は元々あなたと同郷の方（武寧の人）で、彼の修行や知識・見識は、江西の禪林において抜きんできており、彼に匹敵する者はめったにいない。先日、運送副使の天覚居士は惟清に南昌観音寺の住持になるよう頑なに要請したのだが、惟清は承知しなかった。その理由はいささか他の人には話しづらいものだったので、私は彼に自ら天覚居士に謁見し、経緯を説明するよう勧めた。現在、案の定観音寺の住持になるという命令は撤回され、その上、禪師は天覚に招かれ官邸にて夏安居を行っている。彼は初秋に夏安居を終えたらすぐ帰ってくるだろうと私は思う。彼が武寧を通過する際

には、あなたのところにしばらく滞在するよう招待しても良いだろう。彼はかくも尊敬でき、愛らしい人物なのだ。噂に聞くところでは、彼は故郷の高居山に草庵を結んで一人暮らしたいと考えているという。この話が本当かどうか分からない。彼から受け取った手紙の中で彼はあなたの草堂に少し滞在するかもしれないと言っていた。

黄庭堅 頓首

元祐7年(1092)の夏、黄庭堅は母の喪に服していた時期に、武寧の高士鄭郊に宛ててこの手紙を書いた。その目的は、彼らにとって共通の方外の友である惟清禅師の状況を知らせるためであった。：当時、江南西路の運送副使の任にあたった張商英は、惟清を名指して洪州観音寺の住持になるよう求めたが、惟清禅師には様々な理由があって、行こうともしなければ行きたがりもしなかった。黄庭堅らの忠告をうけ、惟清禅師は洪州に赴き天覚に謁見して理由を説明した。その結果、望み通り任命を辞退できたばかりか、張商英に招かれて官邸にて夏安居を行い、四六時中経論を談じることとなる。黄庭堅は書状のなかで、惟清は初秋に夏安居を終えたらすぐ帰ってくるだろうと予測していたため、惟清が武寧を通過する際には、しばらく滞在してもらい、親身にお話して、慰めると良いと鄭郊に伝えた。黄庭堅は惟清がこの度の曲折や変事を経て、意気消沈し、高居山に草庵を結び隠遁してしまうことを最も懸念していたので、鄭郊に自身に代わって気にかけるよう頼んだ。

張商英が惟清に住持になるよう要請した件を鄭郊は知っていたかもしれないし、知らなかったかもしれない。もしくは少し知っていたが、詳しいことは知らなかったかもしれない。共通の親友として、黄庭堅がこの書を書いた第一の理由としては、惟清は彼に草堂を訪れるように教えたが、鄭郊がこれを把握しているかどうか知らなかったため、知らせる義務があったからである。第二には、黄庭堅は鄭郊が惟清の一件を中途半端に聞いただけで、事態の全容を理解できていないことを心配していたため、わざわざ

ざ手紙を送って説明したのである。第三には、最も重要な理由として以下のことが挙げられる。黄庭堅は惟清が武寧の旧山高居に隠遁することを望んでいると噂に聞いたが、これは黄庭堅が最も見届けたくないことで、最も憂慮していたことでもある。そのため、彼は手紙を出して鄭郊に状況を理解してもらい、精一杯慰めてもらうことによって噂が現実にならないようにした。以上が書を送った主な目的である。鄭郊が事の要点をつかめないことを恐れて、黄庭堅は書の中で情にも訴えており、書の冒頭で惟清はあなたと同郷の人であると言っている。つまり、あなた方二人には同郷のよしみがあるため、惟清のことを気に掛け、面倒をみる義務があるということである。それから、惟清の品行や見識を賞賛することにより、このように類まれなる才能を持つ高僧が自ら世を遁れようとするのを見過ぎないで欲しいと鄭郊に呼びかけている。このように、手紙の中では散々心を砕きながら言葉を慎重に選んでおり、これは黄庭堅にしてみれば珍しいことであった。

手紙は長くなく、文字も平易である。しかし書状の真意について、その詳細を察することが出来る人は少なく、かえって多くの疑惑を生んでいる。書状の受取人は誰なのか？観音寺はどこにあったのか？張商英はなぜ惟清に観音寺の住持になるよう要請したのか？また、惟清はなぜ固辞したのか？など……ごく短い百十字は波譎雲詭で、真意が霧に包まれている。こうした疑惑は書道界のみならず、文学と史学の世界を千年近く困惑させており、今なお論争が絶えないため、筆者は不躓ながら考証と解釈を試み、今真相を明らかにしたい。

## 一、書状の受取人と高居における庵の建築

周知のように、宋代の手紙は封筒の中に収められており落款は封筒に書かれていた。手紙と封筒は混然一体であり、当時の拜帖に類似している。封筒上に受取人の名があるため、本文の中で再び呼び名を書くのはまれで

あった。当時はこれで問題なかったのだが、長い年月を経て封筒が破損したり失われたりした場合、多くの手紙の受取人が歴史上の謎となった。

本稿で扱う「惟清道人帖」はまさにその例で、受取人はいったい誰なのか？ということが後世の人を悩ませている。今に至るまで論争が続き、未だ定説は存在しない。このような状況が生じた1つの原因は、歴代の黄庭堅の文集のなかには、宋代乾道の本『豫章黄先生文集』<sup>3</sup>に始まり、明代の弘治や嘉靖の通修版『黄先生全書』<sup>4</sup>や光緒20年（1894）の『宋黄文節公全集』<sup>5</sup>、さらに現代になって四川大学出版社が出版した『黄庭堅全集』<sup>6</sup>や和江西人民出版社の『黄庭堅全集輯校編年』<sup>7</sup>などに至るまで、この書状を収録したのもあれば収録していないものもあり、たとえ収録していても受取人に関する情報や記載がないことによる。2つ目の原因は、あらゆる黄庭堅の年譜は、宋代の山谷先生の甥である黄𨾏が編纂した『山谷先生年譜』<sup>8</sup>から現代の張延旭の『黄庭堅年表』<sup>9</sup>や鄭永暁の『黄庭堅年譜新編』<sup>10</sup>に至るまで、この書状の記載がないものが大多数で、記載があったとしても受取人の説明がないためである。その執筆時期すら様々な説があり、水賚佑先生、張延旭先生は紹聖元年（1094）に書が執筆されたと考える一方で、黄君先生は元祐8年（1093）に執筆されたと考えている。3つめの原因として、黄庭堅の書道作品集は、清代の『三希堂法帖』<sup>11</sup>から、劉正成編『中国書法全集』<sup>12</sup>や周侗編『中国墨跡大全』<sup>13</sup>、さらに汕頭大学出版社の『黄庭堅書法集』<sup>14</sup>や黄君編『黄庭堅書法全集』<sup>15</sup>などに至るまで、どれもみな書状の受取人の紹介や記録がないことが挙げられる。4つめの原因は、武寧県は明代嘉靖41年（1562）から現代の2008年まで合わせて八回、縣志を改訂している。古跡、文芸、隱士、仏教と道教の寺院や解釈などから、山谷、鄭郊、惟清に関する記載は数十回に渡り、「与分寧蕭宰書」<sup>16</sup>でさえ、元より隣県の県令蕭從に宛てた手紙ではあるが、惟清について少々言及しただけで収録された。にもかかわらず、惟清の「惟清道人帖」は意外にも収録されていなかった。まるでこの書状が武寧の人宛てに書いたものではなく、武寧の人とは無関係であるかのようだ。このことは

本当に理解に苦しむ……以上の状況からすると、「惟清道人帖」は昔から受取人がはっきりしておらず、考証も行われていなかった。今日に至るまで、受取人についての見方は意見が分かれ、定まっていない。例えば、水賚佑先生は2001年に自著において「この書状は山谷が彼の友人である張商英に惟清道人を紹介する手紙である」<sup>17</sup>と述べている。陳志平教授は2005年に「受取人は当時武寧の宰であった呂晋父」<sup>18</sup>と断言している。李貴教授は、2018年に「後世に伝わる黄庭堅のいわゆる「惟清道人帖」は、実際は鄭交宛ての手紙である」<sup>19</sup>という新しい見解を打ち出した。

では、書状の受取人は一体誰なのであろうか？また、李貴教授はどうして受取人が鄭郊だと述べているのだろうか？この疑問と向き合うため、筆者は以下で書の内容と関連史料を結びつけて考察する。

第一に、書の「惟清道人、本貴部人」という文面から、受取人はおそらく惟清と同郷で、ともに武寧県の者だと知ることができる。武寧にはちょうど鄭郊という者がおり、清代乾隆20年『武寧縣志』<sup>20</sup>には以下の記載がある。

鄭郊、字子通。襟期清曠、志行純潔、慕周茂叔為人、鑿池種荷花為樂。每天氣清爽、縱鴛鴦池中、往來披拂、五色相亂。郊飲酒賦詩其間、悠然有塵外之想。黃山谷詩云：“鴛鴦終日愛水鏡、菡萏晚風彫舞衣。”皆實錄也。郊與山谷及清上人為忘形交、山谷訪清上人、過郊草堂、因相伝為草堂山人。

縣志が記載する状況によると、鄭郊は武寧の同郷であるという要素に適合する。第二に、書状における口調から、黄庭堅は受取人と親密な関係にあり、馴染みも深いということが見て取れる。これは、書状の中で秘密を話したり——「難為不知者道」、命令文願望文を使用していたり——「可邀与款曲」、さらに互いに連絡を取り合っていたり——「得渠書、頗説復來草堂少淹留也」などから読み取れる。彼らの関係は良好だっただけではなく、熟知の境地にまで達していた。これは縣志における「郊与山谷及清

上人為忘形交」という記述ともつじつまが合う、さらに山谷道人の「贈鄭郊」<sup>21</sup>という詩は、彼と鄭郊の深い友情の確たる証拠である。その詩は以下の通りである。

高居大士是龍象、草堂丈人非熊羆。  
不逢壞衲乞香飯、唯見白頭垂釣絲。  
鴛鴦終日愛水鏡、菡萏晚風彫舞衣。  
開徑老禪來煮茗、還尋密竹逕中歸。

第三に、贈った詩と書状、いずれの中でも見られる「高居」・「草堂」という表現は縣志の中の「草堂」と一致している。この「高居」・「草堂」は地名であり、寺院の名前、堂号でもある。同時に当事者を指している場合もある。例えば、「高居」は書状において武寧県年豊郷（現在の船灘鎮）の高居寺を指しているが、詩の中で惟清禪師を指している。草堂もまた同様で、書状のなかでは鄭の住居の地を指しているが、詩の中では鄭郊居士を指している。これは古書、特に禪宗典籍によくあることだ。例えば、黃龍二祖寶覺祖心禪師は晩年の住まいとして寺院の西花園に居宅を建て、「晦堂」と命名した。（これは中国の禪師が堂号を号とする始まりである）後世の諸典籍は「晦堂」・「晦堂和尚」・「晦堂祖心」という表現を用いて寶覺禪師のことを指している。よって書状の中の「復來草堂少淹留也」は惟清が草堂という場所に来るという解釈もできるし、惟清が鄭郊のところに行くという解釈もできる、どちらの意味に理解しても問題ない。意味は同じである。草堂は鄭郊の住まいであり、鄭郊本人を指している点について黃庭堅は「跋荊州為興上人書<贈鄭郊>詩」<sup>22</sup>の中ではっきり説明している。

癸亥歲、予解官太和、過武寧、聞清上人當來延恩、因謁鄭子通問消息、題詩子通之壁。草堂、鄭郊處士隱處也。



黄・鄭・清3人は親友なので、清が武寧に戻れば必ず鄭と連絡を取る。そのため、黄は清禪師が延恩寺に行ったことを聞きつけて鄭の所へ消息を探りに来た。その際、上記の詩を草堂の壁に書いた。この跋は黄・鄭・清3人の長きにわたる親密な関係性と友情をさらに証明した。跋の中の延恩すなわち延恩寺は高居寺とともに武寧にある。惟清は高居寺戒禪師のもとで戒を受けたのち、延恩寺の法安禪師に参じた。数年後、全国各地を回り方々から参学したのである。「跋招清公詩」<sup>23</sup>にこのような説明がある。

草堂、鄭郊処士隱處也。小塘芙蓉盛開、使鷄伏鴛鴦卵、與人馴狎不驚畏。老禪延恩長老法安、師懷道遁世、雖与慧林本、法云秀同師、頗以討飯養千百閑漢為笑也。清公少時蓋依之数年、嘗教誨道：“俗云：‘万事隨緣、是安樂法’”清公云：“如安禪師、心無簡拙、可愛可欽。”舟中晴暖、閑弄筆墨、為太和積智興書。

乾隆47年『武寧縣志』<sup>24</sup>に「鄭氏草堂」の記載がある。

宋処士鄭郊別業也。在県治東五百步金鷄橋側。郊好學樂貧、種芙蓉千叶、中養鴛鴦、兩兩浮水上、馴撓如家畜。黃庭堅時相過從、有詩云：“鴛鴦終日愛水鏡、菡萏晚風彫舞衣。”詳見《豫章集》。今池已為溪水沖潰、猶呼荷花塘云。

草堂は鄭郊隱士の居所で黄山谷と靈源惟清禪師が度々訪れる場所であると以上の詩・跋・志は明らかに説明している。同時に黄・鄭・清のただならぬ友情も裏付けられる。さらに文中の「旧山高居」「復來草堂」などの表現から、書状の受取人が鄭郊であると断言できる。

「高居大士が惟清」であるという断定は以上の経緯の他、多くの史料によって証明されており、惠洪の「昭默禪師序」<sup>25</sup>では次のようにある。

公名惟清、自号靈源叟、世為洪州武寧陳氏子。童子時誦書、日數千言、伊吾上口。有異比丘過書肆、見之引其手熟視、大驚。勸其父母使出家、公即忻然往依高居某為師、几何為僧、受具足戒、即起游方。

序によれば、惟清は高居寺で出家し、そこで具足戒を受けた。同じ説明が黄庭堅の「与欧陽元老」<sup>26</sup>にもみられる。

清公歸所受業院、武寧之高居、想甚得所也。

文中に出てくる惟清が教えを請いた場所、すなわち出家し戒を受けた場所は、武寧高居寺である。「与死心道人書」<sup>27</sup>のなかでも惟清と高居寺の関係は言及されている。

興、侗在彼否？此両道人却需要大剥淨、未審如何？清公到高居、計無不安穩、亦頗為衲子追逐耶？然已是名滿天下、恐終不得閑耳。

以上の史実はみな、惟清と高居の関係が不断かつ密接であることを証明している。高居寺は惟清禪師のふるさとにあり、出家した場所でもあるため、その寺に寄せる感情及び思い入れの度合いは他の寺とは比べ物にならない。また、彼と高居寺の密接な関係が彼の書状「答高居山主」<sup>28</sup>にも窺える。

示諭、甚荷遠憂、然服藥多種、而切驗其効皆在時節之自然耳、故且置服食而任吾縁之如何也、况不堅之物豈復久長？世人貴末棄本、故区区百年泡幻之質、作諸計較而終不免敗坏沈墮。以是推之、則吾如来藏中無相靈丹、若能煉服、縱捐百千幻身、則吾不病也。謾此奉報、若能于中取効、却是世間妙方也。

高居が惟清の心のなかで代えがたい地位にあるからこそ、観音寺住持任命の波乱の後に心身が疲れ果て意気消沈している惟清がここに来て感情の抛り所と庇護を求めるのは人情の常である。これは惟清禪師が高居で庵をかまえ、一人で暮らす原因となる。

## 二、観音寺及びその住持就任要請

まず、惟清禪師の詩「辞張無尽請住豫章観音寺」<sup>29</sup>を讀んでいこう。

無地無錐徹骨貧、利生深愧乏余珍。

鄺中大施門難啓、乞与青山養病身。

詩句が平易で率直な上に、題名を讀むだけで詩を書いた目的が読み取れる。この詩を讀むと、人々は豫章観音寺がどんな由緒のある寺院なのか？張商英はなぜそこの住持に惟清を任命したいと考えたのか？惟清禪師はなぜ辞退したのか？などと思わず考えを巡らせるだろう。史料によると、当時の張商英は毅然とした態度を取った。——「公檄分寧邑官同諸山、勸請出世于豫章観音、其命甚嚴」<sup>30</sup>、言い訳を聞かず、融通が利かない勢いであった。一人は朝廷の官僚、一人は化外の高僧。一人は派遣したいが、一人は従わない。まさに水と火のようであった。張り詰めた空気の中で惟清禪師はこの詩を書いた。柔をもって剛を制すやり方で、彼は弱弱しい言葉を用いて強い意志を示し、張商英の許しを請いた。年老いてもうすぐあの世に行きそうな雰囲気でも哀想な詩を書いたのである。実をいうと、黃庭堅は1092年に惟清禪師のことを若いと言っており、加えて彼は政和7年(1117)に示寂したという状況から判断すると、当時の彼は壮年期だったと言える。実際、この詩は大して役に立たず、その後も張は惟清禪師の着任を厳令した。

次に、豫章観音寺の由緒及び今昔をさかのぼり、張商英が惟清に住持を任命した理由を究明しよう。清代の史家陳弘緒(1597—1665)の研究によ

ると、観音寺は「蓼洲に在り、晋初の創建、現在ではすでに廃寺になって久しい」<sup>31</sup>、蓼洲はすなわち古谷鹿洲であり、南昌城の西南に位置し、現在の惠民路西である。四庫本『水経注』の記載によれば、「贛水又経谷鹿洲、即蓼子洲也、旧作大鰲処。」とある。三国の時代、ここは呉国の大將軍呂蒙（178—220年）が大船を作る場所であった。晋代の初めに建てた観音寺は南昌城内の最初の寺院であり、地位が高く、駐在する高僧も多かった。滄仰祖師の一人である仰山慧寂禪師（840—916あるいは804—890）や徳山高徒岩頭全竅禪師（？—887）などもその一例である。豫章観音寺は由緒ある名寺ともいえる。しかし「今已久廢」の4文字は、この寺が明の末期・清の初期にはすでに廃れていたということを示している。関連記録によると、観音寺は、唐・宋代に比較的栄えていた。宋・明代に洪州の町の中心が東北方向に移動し、加えて唐末期・宋初期に豫章西山寺群の台頭により、蓼洲南の片隅にある観音寺は宋代から斜陽のごとく没落の一途をたどった。張商英は北宋中期の名士として、南昌城にある観音寺の重みももちろん知り尽くしている。寺院を再興し大きな功をたてることは、彼が考えた偉大な志、あるいは新政の措置かもしれない。

この偉大な志を実現するにはまず良い住持を探さなければならない。こうして、張商英がなぜ惟清禪師に白羽の矢を立てたのかという問題に辿り着く。「夫住持者、先弘道德、後具因縁、内明仏法之机、外赴群生之望」<sup>32</sup>——これは黄龍宗祖師慧南（1002—1069）の言葉である。住持は仏法に精通し民衆の望むところに身を投げ出さなければならない。この理屈は慧南禪師と同様、張商英も知っている。江西の寺院について彼が知る限り、このような人材は靈源和尚をおいて他にいない。なぜこのように言えるのか、まずは惟清の経歴を見ていくとしよう。

惟清、字覺天、号靈源叟。生南州武寧陳氏、方垂髫上学、日誦数千言、吾伊上口。有異比丘過書肆、見之、引手熟視之、大驚曰：“菰蒲中有此儿（児）耶？”告其父母、聽出家従之、師事戒律師、年十七為大僧。

……

公風神洞氷雪、而趣識卓絶流輩、龍図徐禧德占、太史黃庭堅魯直皆師友之。其見宝覺、得記荊、乃公為之地。宝覺鐘愛、至忘其為師、議論商略如交友、諸方号“清侍者”、如趙州文遠、南院守廓。<sup>33</sup>

これは「禪門司馬」惠洪（1071—1128）の記録である。仲温暎瑩（1122—1297）の筆先における惟清は惠洪のものと似たり寄ったりである。

靈源禪師早參承晦堂於黃龍、而“清侍者”之名著聞叢林。<sup>34</sup>

以上の資料にある惠洪は靈源の兄弟弟子で、仲温暎瑩は靈源の2世代後の人物である。1人は同時代を生き、知り合い、親交を深めた。もう1人は世代が異なり、知り合うことも、関わりあうこともなかったが、惟清に対する評価は驚くほど一致している。ゆえに信用度が高い。彼らの記録によると、靈源和尚は当時、一代宗師晦堂祖心の侍者を勤めていた。名分は侍者であるにもかかわらず、祖心に重用され、高く評価されていた。惟清にとって祖心は師であり友であり、対等に道の論議をする相手であった。そのため、「清侍者」の名は寺院中に知れ渡っていた。要するに、惟清は良い住持としての二つの資質を備えているということだ。一つは名門宗派の弟子であること、二つ目は名声が天下に知れ渡っていることである。もちろんそれだけでは不足である。才能と人を見る目を持っている張商英は人選にあたって修行や能力を考察したはずである。では、惟清の修行と能力はいかほどのものか？まず、黃庭堅の評価を見ていく。彼は「惟清道人帖」において、以下のように述べている。

其操行智識、今江西叢林中未見其匹亞。

また、「僧惟清帖」<sup>35</sup>の中でこのようなことを述べている。

此僧真法器、規摹宏遠、但年少、自以少礎鍛之功。

『答徐甥師川』<sup>36</sup>において更に褒めたたえていた。

太平清老、老夫之師友也。平生所見士大夫、人品未有出此公之右者。

私たちが知っている通り、黄庭堅は科挙に合格し官僚となった上に、「詩書双絶」と讃えられ名声が天下に知れ渡った文人である。名節と清廉、潔白を最も重んじている彼でさえ、礼を尽くして尊敬し、賞賛が絶えない人物はどれほどの節操・人徳及び能力の持ち主か想像がつく。要するに、靈源は僧侶の中で有名だけでなく、彼の名声は世間に広まっていた。彼の品格と節操は早くから世の人々に重んじられている。言うまでもなく黄龍は北宋の真宗皇帝から名前を賜った寺院で、全国寺院の領袖のような存在であり、禪宗の中心となっている。靈源の師匠は祖師慧南の直系の継承者として慧南の後わずか12年間住持を勤めたのち、5回の辞退を経て引退した。以後、「晦堂」に1人移り住み、20年間表舞台に出てこなかった。

師住持十有二年、性真率、不樂事務、凡五辞乃退。揭其室曰：晦堂。<sup>37</sup>

要するに、天下一の寺院である黄龍寺には20年近く住持がいなかった。その間、寺の実質的な差配役は靈源惟清禪師であった。このことから、惟清禪師の組織管理能力が優れ、皆を納得させるものだったことが分かる。兄弟子の死心禪師（1044—1115）が雲岩禪寺の住持になる時でさえ、靈源が手伝いの弟子を派遣した。こうして事柄を説明できる：

迨死心禪師出世雲岩、靈源遣二三子、往佐之。<sup>38</sup>

師の知名度・名声・修行・節操・能力まで、あらゆる面において惟清禪

師は住持になる資質を備えている。他に何か条件があるとすれば、年齢である。年齢は決定的な条件ではないが、重要である。それでは、靈源和尚は何歳だったのであろうか？史料に惟清の生年月日の記載がないため、彼の年齢はいまだ謎である。しかし黄庭堅が武寧県宰晋父に宛てて書いた「僧惟清帖」に一つの重要な手がかりがある。

庭堅叩頭：僧惟清者、聞府中虚観音法席而召之、誠為徳挙。此僧真法器、規摹宏遠、但年少、自以少礎鍛之功、方欲調心養道、极古人之門戸。輒欲以病自陳、幸府中垂聴、君子成人之美、諒諸公必以為然。恐見漕台及府座、幸為道此。庭堅叩頭。

書状では、県宰にもし機会があれば張商英及び知府に惟清の口添えをして欲しい「幸為道此」と単刀直入に懇願した上、惟清は「但年少」とも言っていた。この書状を書いたのは元佑7年（1092）春で、当時黄庭堅は48歳になっていた。ここから推測すると、惟清は40歳以下である。そうでなければ黄が「年少」という言葉を、40歳を超えていて、自分と年齢が近い人物に使うはずがない。屋烏の愛があるにしても、責任逃れの必要があるにしても然りである。つまり、当時惟清は経験豊富で精力的な壮年期にあたり、正に仕事を成功させることが出来る黄金期にいたことが分かる。このため、張商英は人材を選ぶことに関して、特別見る目があつたと感心せずにはいられない！

もちろん人々は張商英がなぜ惟清禅師のことを知り尽くしているか疑問を持ち始めると思う。これは、張商英と黄龍宗のつながりから説かなければならない。『羅湖野録』巻四の記載によると

無尽居士見兜率悦禅師、既有契証、因詢晦堂家風於悦、欲往就見。悦曰：“此老只一拳頭耳。”乃潜奉書於晦堂曰：“無尽居士世智辯聰、非老和尚一拳垂示、則安能使其知有宗門向上事耶？”未几無尽游黄龍、訪晦堂於西園、先以偈書

默庵壁曰：“乱雲堆里数峰高、絶学高人此遁逃。無奈俗官無住处、前驅一謁散猿猱。”徐扣宗門事、果示以拳頭話、無尽默計不出悅之所料、由是易之、遂有偈曰：“久響黄龍山里龍、到来只見住山翁。須是背触拳頭外、別有靈犀一点通。”靈源時為侍者、尋題晦堂肖像曰：“三間逆摧、超玄机於鷲嶺。一拳垂示、露赤体於龍峰。聞時富貴、見后貧窮。年老浩歌歸去棹、從教人喚住山翁。”<sup>39</sup>

無尽居士張商英は黄龍宗三世の兜率從悅禪師（1044—1091）の弟子であるだけではなく、分寧へ赴き黄龍寺を自ら訪ねて祖心禪師に謹んで挨拶をした。また惟清に会ったことがあるだけではなく、惟清が晦堂の肖像を「尋題」したことから言うと、さらには張の詩の逞しさをよく思わず、そこで題字と跋文の方式について張と無言の対決をしていて、特に「從教人喚住山翁」の7字の中に、張に対する不満と、さらには軽蔑をも明らかに表している。惟清と張商英はいわゆる雨降って地固まるといった方法で顔見知りから親友になり、張が惟清を指名し観音寺の住持になるよう要求したことから見ると、惟清はすでに彼の心の中に強い印象を残していたとわかる。惟清への全面的な理解と憧れの念、さらに観音古寺を繁栄させたいという差し迫った精神状態から、惟清禪師に住持になるようお触れを出し、惟清は自然と張商英にとって第一候補でかつ変えのきかない選択肢になったのである。

### 三、夏安居の招待、住持就任を固辞

上述のように、観音寺は豫章城区で史上最古の寺院で、多くの高僧が駐錫してきた。現在も大権を握る転運使が顔を出して誘い合わせる。さらに県や邑の官吏及び諸々の山の長老と一緒に説得してもらい、十分すぎるほどに顔を立てたと言える。しかし招待を受けた惟清はただの侍者でしかなく、当時はまだ首座ですらなかった。普通なら相手がこのように礼を尽く



しているのであるから、惟清もこれを機に事を上手く運び、相手や自分の便宜をはかるはずである。しかし予想に反して、惟清はこの貸しを作らず、張商英がどれだけ促しても、どれだけ切羽詰まっても、このように頑なに従わず、相手の顔を立てずに、興化に移住し、その後は病気を装い、そしてまた詩を書き、同時に人に頼んで詫びを入れてもらっていた。当時ちょうど黄庭堅が母の死のため家にいて、現存の資料によると、黄庭堅は惟清のために尽力し、心を配り、詫びを入っていた。「僧惟清帖」と「与興化海老帖」がその証拠である。朱京（1038—1101）、朱彦（1055—1122）兄弟など他の人に関しては、彼らは惟清の親友であり、また朝廷に任命された官吏でもあった。朱京世昌はそのときちょうど湖北・京西・江東の運転判官で、分寧から近く、また朱彦世英はそのとき舒州の司法参軍を務め、彼も分寧から遠くなかった。彼らが惟清のために詫びを入れたかどうかは、証拠がないためたためを言うことはできない。門徒の陳瑩中（1057—1124）や戴道純（生没年不詳）などは、そのとき朝廷のために任官していたが、一つに年少で位が低く、二つに彼らが惟清を師と仰いだのがこの一件の後だった可能性が十分にあるため、ここでは差し当たって扱わない。

ここで言うべきは、黄庭堅が対策を提案し、多方に頼み込んだ他に、直接張商英に陳情したのかどうかである。確証には欠いているが、その可能性は大いにある。理由は二つある。一つ目が、黄、張ともに年齢が若く、またどちらも黄龍居士で、さらに同じく元祐党の人だということである。同じ年齢・身の上・経歴は彼らに多くの共通言語を持たせた。二つ目は、元祐年間に、黄と張は同じく朝廷で任官し、一人は秘書省校書郎、一人は開封府推官だった。このとき二人には交友があり、その友情はとても厚かった。元祐2年（1087）張商英は提点河東路刑獄として赴任し、黄・蘇軾・張耒などは彼を見送り、「送張天觉得登字」<sup>40</sup>という詩を作った。その一年前、張は分寧へ至り、兜率のところに宿泊し、黄龍寺に赴いたとき、黄家を訪れた可能性が大いにある。そのとき黄庭堅は母を亡くし棺を持って家に帰る道中であつたが、張の「黄龍崇恩禅院記」中には、「我行双井、

至于查田。升太平之嶺、望幕阜之巔」<sup>41</sup>などの句がある。双井は黄庭堅の故郷で、張は双井を通ったからには、常識的には必ず慣例通りに訪問するであろう。以上のことが黄と張は関係が深いことを表し説明する。このため直接張商英に詫びを入れた可能性は大いにある。手紙がわざわざ送られたのか、惟清によって持ち込まれたのかは、実物がないので軽率に判断を下すわけにはいかないだけである。

惟清が頑なに観音寺に行かなかった原因に関して、注意深い読者は上記の「惟清道人帖」の中で、「難為不知者道」が、なぜ難しかったのか、何が難しかったのかの手がかりに気づいたであろう。この問題をはっきりさせるためには、過去に遡らなければならない。前述の通り、熙寧2年(1069)に黄龍祖師が死去し、晦堂祖師が住持を引き継ぎ、12年後の元豊4年(1081)に5度の辞退を経て引退した。それから紹聖4年(1097)に百丈元肅(生没年不詳)が黄龍に来て住持を引き継ぐまで合わせて16年間、黄龍寺は主僧がいなかった。この16年間の黄龍寺の全ての仕事は全て惟清が侍者や首座の身分で行なっており、概ねしっかりとこなしていたため、少なくとも前の住持の祖心は満足していて、寺衆は大人しく彼に任せ、役所も口を挟まなかった。これも前述の通り、黄龍寺は当時全国の学生が集まる大寺院のトップであり、学術の中心であった。観音寺も由緒ある古寺であったが、結局のところ衰え廃れ再興を待っていたのであるから、発展を極めていた黄龍と同列に論じることはできない。その上黄龍の主僧はその時(1092)すでに12年空位であった。この期間祖心の一番弟子で、江湖中に名が知られていた死心悟新はずっと寺におり5歳になるところであったが、祖心和尚は寺の継承者について全く見解を示さなかった。——目の利く死心は、祖心の意は靈源にあるとはっきりわかっていた。黄龍の住持になる望みがないということも知っていたからこそ、死心禪師は本邑雲岩寺の住持になった。前に述べたように随行し補佐した弟子は全て惟清が手配していた。つまり惟清が黄龍寺を引き継ぐにあたっての最大の障害がすでに、もしくはしばらくして離れ、まさに住持の任が目前に迫ったその時、張商英は突

拍子もない要請を突きつけて、出来上がった盤上を掻き乱した。この時この状況で、感情からいっても理屈からいっても、惟清の心に少しの胸騒ぎも起きなかったと言えるであろうか。少しの考えもなかったと言えるであろうか。惟清はまたどうして二つ返事で引き受けて、喜んで招聘に応じて赴けたであろうか。黄龍の住持をするのは望むところではなかったとしても、黄龍の住持にならなければ、どうして師である晦堂の引き立てと、兄弟子死心による成功の手助けに申しわけが立つであろうか。

惟清のこの時の立場はかなり微妙というべきで、行けば望むところでは無く、行かないのも政令に触れ、少しでも不注意があれば未来永劫元通りにはならなかった。この状況や、その間のきっかけ、惟清の心中の考えも含めて、黄庭堅は全てをはっきりわかっていた。また彼の態度は惟清を支援していて、ひいては彼こそが惟清の裏で糸を引いていたはずだ。100パーセント間違いなく、彼は惟清が枝葉末節にとらわれ観音寺に行くのに賛成していなかった。そうでなければあちこちに顔を出して惟清のために詫びを入れなかったであろう。このために彼は武寧県宰に直筆の手紙を送ると同時に、諸々の山の長老に「与興化海老帖」<sup>42</sup>のような手紙を送った。

承観音虚席，上司甚有意於清兄。清兄確欲不行，亦甚好。蟠桃三千年一熟，莫做退花杏子摘却。此事黄龍、興化亦当作助道之縁，共出一臂，莫送人上樹拔却梯也。

黄庭堅がこれらの人に手紙を送ったのは、張商英が「檄分寧邑官同諸山、勸清出世豫章観音（分寧邑官と諸山にお触れを出して、豫章観音の住持になるよう勸請し）」、張がこれらの人に勸請したからには、おそらく彼らの意見を聞き入れる可能性があったからであろう。これが、黄庭堅が彼らに手紙を送った原因である。手紙の中ではとても直接的で、毎度惟清のために身を引いて助けるようお願いをしている。武寧県宰に宛てた書状の中の「君子成人之美、諒諸公必以為然。恐見漕台及府座、幸為道此」や、興

化海老（生没年不詳）との書状の中の「此事黄龍興化亦当作助道之縁、共出一臂、莫送人上樹拔却梯也」など、手紙の中からすでに黄龍について言挙していて、黄龍と晦堂の影響も考慮している。また惟清が黄龍寺の僧であることから見ると、張商英は必ず黄龍の意見を尊重して考慮するであろう。だから黄庭堅は必ず手紙を送るか、もしくは自ら晦堂のもとを訪れて彼を説得するであろう。晦堂も黄庭堅の師匠であるため、黄庭堅があちこち回って手紙を書いて、惟清のために身を引くよう頼んだのは、十中八九師匠晦堂と相談した後の結果だろう。黄庭堅は書の中で黄龍と興化にしか触れていない。しかし張は「檄分寧邑官同諸山（分寧邑官と諸山にお触れを出）」している以上、必ず同時に、宝山・兜率・雲岩・玉溪・法昌などの当時の分寧の由緒ある寺の長老に手紙を書いているであろう。惟清が黄龍の住持であり興化に寓居していることを考慮すると、上述の諸々の山の意見は、むしろ黄龍や興化よりも客観的で説得力があるためである。

その中でも特別なのが兜率禪寺で、張が真理を悟った地であり、それを裏付ける場所である。また彼がその師である従悦禪師と付き合いのあった時間は短かったが、関係性は深かった。従悦禪師はすでに死去していたが、従悦が年末の11月3日に坐化したのから算出すると、それから3、4ヶ月の時間しか経過しておらず、まさに無尽は悲しみのうちにあり、またまさに兜率が情に訴えかける最高のチャンスでもあった。——これはその後張の兜率一派の兄弟弟子を気遣ったり、従悦のために諡号を申請したり、使者に祭文を託して参加させた。ひいては荊州に左遷された時に、大慧宗杲（1089—1163）は湛堂文准禪師（?—1115）のために塔銘を作るようお願いされた。彼は文准と宗杲がかつて兜率寺の僧だったため、二つ返事で引き受けるとみていた。——このためその時の兜率禪寺の住持である慧照禪師（生没年不詳）は間違いなく黄の手紙を受け取っているだろう。他に張は分寧へはお触れを出したが武寧へは出さず、黄庭堅はただ惟清の俗籍が武寧にあるためその宰に書を送った。当事の場所でありお触れを受けた主である分寧の宰としては、理屈からすれば黄庭堅は必ず手紙を送るか、もし

くは礼儀を重視していたことから、黄龍寺と同じように、ましてや双井は  
皇城から遠くもなかったため、黄庭堅は自ら訪問し頼み込んだかもしれな  
い。

惟清は黄龍で「代理」住持の役割をしっかりとこなしていた。では、どう  
して張商英は同門や親友として正式な住持に任命するよう助力するどころ  
か鍋底の薪を抜くようなやり方で肝心な時に横槍を入れたのだろうか？他  
に人に告げられない事情があって他の人に地位を空けて障害を取り払った  
のか、それとも本当に黄龍の実情に関して全く理解しておらず、ただ一心  
に観音寺のためだけに高僧の配置を図ったのか。当然張商英の若くして成  
果をあげ、思い切ったことをなす、気概に満ちた性格や振る舞いから言っ  
て、靈源に観音の住持になるようお触れを出した目的には、裏表がなく、  
私心や雑念はなかったであろう。黄龍について言えば、惟清のあとは死心  
であった。死心は張商英との付き合いは少なく、むしろ靈源との付き合い  
が多くとても親しかった。さらにその後の張商英と黄龍の縁故から見ると、  
そのような面での繋がりもなく、ひいては紹聖3年（1096）10月左遷され  
江西へ戻り洪州の権知をしていた。この時惟清はちょうど舒州太平寺の住  
持をしていて、黄龍には代理の住持すらいなかった。このとき地方長官と  
して、彼が黄龍へ推薦した人選は、意外にも晦堂祖心の同門の弟弟子であ  
る百丈禪師の住持元肅禪師であった。その原因は元祐6年（1097）、当陽  
玉泉寺の承皓禪師（1011—1091）が高齢のため張に元肅禪師を自らの代わ  
りとして推薦したことだ。張は元肅を説得しようとしたが元肅は従わな  
かった。そうではあったが、張はこれをきっかけに元肅禪師のことを覚え、  
それがあってこそ紹聖4年（1097）の元肅の黄龍行きがあった。靈源に観  
音に赴くよう命じたこの件に関して、張にはほとんど全く企みはなく、一  
心に観音古寺を盛り上げることだけを考え、非凡な僧靈源のことしか頭に  
なく、黄龍のもつれや黄龍が手薄になることは気かけなかった。当然こ  
れも役人の通弊で、常日頃偉そうに人を顎で使い、頑固で独善的な悪い癖  
がよく出て、何かあれば往々にして我意を押し通し、他人の受け取り方は

気にかけて、このためにしばしば事が思い通りにいかず、好意で悪いことをしてしまう。

最後の結果もこの点を実証している。観音に赴くよう命じた一件に関して、靈源は移住し、病を装ったが、詩を書いて心の内を表してもいて、同時に邑や県の官吏や宰相、諸々の山の長老及び黄庭堅、朱世英兄弟などが惟清のために口添えして手助けをしていた可能性がある。しかしこれらは結局のところ助勢しただけで、商英が命を取り下げないと主張すれば、事は終わったことにはならない。またこれらの助勢は全て建前で、本当の原因は「難為不知者道」で、部外者は知る由もない。黄庭堅は官界のなかの人として、官吏のメンツを重んじる気質を深く理解していた。特に張商英のような強引な人は特にそうで、そのため彼は惟清に張商英に謁見し、面と向かって陳情し、経緯を説明して、張の了解を得ることで命を取り下げてもらおうよう進言した。黄庭堅の書の中から、惟清が「果然得免」だということがわかり、このことから惟清に命じたこの件について、張商英は本当に私情を挟んでいなかったとわかる。あったのはただ観音寺のために優れた人を選んだということと、惟清への高い評価であった。このため張は命令を取り下げただけではなく、さらに彼を官邸に留まらせ夏安居を行わせた。慈愛の心情と、切なる期待が言葉にあふれていることが、行間から読み取れる。その一方で、靈源の身を引く策略の方向性が正しかったこともわかる。諸々の措置は役に立っていて、効果が顕著であった。当然惟清が洪州に行く時に他に晦堂や県尹などの私的な書簡や公文を別に持って行ったかどうかは知る由がない。

観音の住持になるよう命じた一件はこのように終了した。張商英にとっては他にもう一人住持を選ぶことであったが、靈源にとっては喜び半分心配半分であった。願いが達成され観音への命を辞去した一方、黄龍の素晴らしい状況もこのために墮落してしまった。この波乱と災難を経て、靈源の心理状態は意気消沈し、闘志が低下したのは間違いない。さらに主僧の地位を狙うという物議を避けるために、彼は黄龍に帰ることすら都合が悪

くなってしまった。このような状況下で、高居に庵を結んで独居を望むのは、その真実の一面を孕んでいて、その偽りのない精神状態を反映しているというべきである。また探求の一面も孕んでいて、外界に向けて発信したメッセージでもある。親友であり同門の友人である黄庭堅は自然と、彼が黄龍に戻り職務を果たし最終的に仏帚を管理することを望んだ。最も恐れたのは、ここから彼が再起不能になり、本当に隠遁、独居して大衆から姿を消してしまうことであった。このため彼は書状の中で、共通の友人である鄭郊に励まし説得するよう頼み、それにより再起を期待した。これが、黄庭堅がこの手紙を書いた背景と理由である。

しかし、黄庭堅の希望はふいになると運命づけられていた。以前は本当に惟清に黄龍の住持をさせる意思が仮にあったとして、現在は惟清の拒絶行為を考慮したのか張商英の情にほだされたのかに関わらず、役所は命を取り下げたであろうし、少なくともことを放置し、長引かせたであろう。当然同じように張商英の情にほだされたのだとしてもすぐに他の高僧に黄龍の住持をするよう頼むことはなかっただろう。ことの展開はこのようになり、黄龍の住持の地位は紹興3年（1096）に張商英が洪州に再度戻って知府になるまでずっと空席で、最後はやはり紹興4年（1097）初めに百丈寺の住持である元肅禪師が彼に強制されて黄龍寺を兼任することになり、黄龍が指導者を失う窮地が終わった。靈源は洪州に帰った後、高居にしばらく住んだが、すぐに晦堂によって黄龍に呼び戻され、淮西の提点刑獄使である朱京世昌の招聘に応じて舒州太平寺の住持になるまでずっと首座を担当した。また元符2年（1099）に洪州より転運使である王桓（生没年不詳）に迎えられてから、やっと元肅の後を継いで正式に黄龍の住持の職務を引き継いだ。

#### 四、結論

上述のように、「惟清道人帖」は、文字は少ないが含意が豊富で、関連

する人物が多く、時間のスパンも長く、活動の地域が広いだけでなく、人物の中に官吏、僧侶、居士がいて、地域が農村から都市まで、住所が役所から堂室まで及んでいる。また話している内容が、明暗が入り乱れ公私が混ざり合っていて、また個人の前途や命運、理想や願望に及んでいて、さらに宗派の継承や寺院の盛衰に関係している。もし掘り下げて分析し詳しく解析しなければ、その奥深さを洞察し、その玄妙さに気付くのは難しい。そのためこの書は書道芸術の傑作であるだけでなく、文学と史学上の価値もこの上なく貴重で、黄庭堅を研究し、黄龍宗と当時の宗教社会、官界や民情などを理解するのに欠かせない一次資料である。

特に説明が必要なのは、黄庭堅が残した諸々のこのような類の手紙は、この一つの手紙だけでなく、むしろ他にもたくさんあり、どれも秘められた点が多く、疑問点が次から次へと重なり、内容は謎となっているということである。「与本州太守」<sup>43</sup>中の太守は誰か、「与雲岩禪師」<sup>44</sup>はいつ書かれたか、「与観音院長老」<sup>45</sup>はどの観音院のどの長老かなどは我々が考証、解釈して疑問を取り除き、真相を再現するのを待っている。もちろん解説方法は、互いに裏付けや説明がしやすいように、体系立てられれば一番望ましい。また考証、解釈するときに、宋代の官史・山谷の年譜・禅宗典籍・寺院系譜・禅師の語録及び、地方誌などを有機的に結び付けなければならない。同時に蘇軾・蘇轍・徐俯・洪駒父兄弟・李清老・欧陽元老・劉克庄・陸游・朱時恩などの文人及び、慧南・祖心・死心・惟清・慧洪・法雲・智興・礼思・仏海・法鏡・棲賢和尚・大慧宗杲・雲卧曉瑩・長寧守卓・渾朴道古などの僧侶の著作や詩文・手紙・書簡・尺簡・集成・註釈・石碑の文字や絵画・金石などを調べて参考にして、真偽を見定め歴史の証拠を収集発掘することで、考証、解釈の結果をより客観的に、正しく、正確にして、誤りを訂正し、真相を整理して明確化させ、根本から整理するという目的を達成し、黄庭堅、黄龍宗ないしは宋代の宗教人文の研究と発掘の助けにしなければならない。



【注】

- 1 傅紅展編：『故宮博物院藏品大系・書法編』第2冊、故宮出版社、2012年6月版、第174—175頁。
- 2 [清] 御刻『三希堂石渠寶笈法帖』第十三冊、乾隆十五年（1750）鐫刻拓本、原石は現在北京北海公園にある。
- 3 [宋] 黃庭堅：『豫章黃先生文集』、上海商務印書館、1912年据嘉興沈氏藏宋本縮印。
- 4 [宋] 黃庭堅：『豫章黃先生文集三十卷、外集十四卷、別集二十卷、簡尺二卷、詞一卷』、明弘治十八年（1505）叶天爵初刻、嘉靖六年（1527）喬遷・余載仕重刻、現在、国家図書館、北京大学図書館等に所蔵。
- 5 [宋] 黃庭堅：『宋黃文節公全集』、清光緒二十年（1894）江西義寧州署刻、刻本は現在、北京大学図書館に所蔵。
- 6 [宋] 黃庭堅著、劉琳・李勇先・王蓉貴点校：『黃庭堅全集』、四川大学出版社、2001年版。
- 7 [宋] 黃庭堅著、鄭永暁整理：『黃庭堅全集輯校編年』、江西人民出版社、2008年9月版、2011年9月修訂版。
- 8 [宋] 黃魯：『山谷先生年譜』、『叢書集成統編』第262冊第67—175頁、台湾新文豐出版公司、2015年3月影印。
- 9 張伝旭：『中国書法家全集・黃庭堅』、河北教育出版社、2004年版。
- 10 [宋] 黃庭堅著、鄭永暁：『黃庭堅年譜新編』、社会科学文献出版社、1997年12月出版。
- 11 [清] 御刻『三希堂石渠寶笈法帖』第十三冊、乾隆十五年（1750）鐫拓本。
- 12 劉正成編：『中国書法全集』、榮寶齋出版社、1991年版。
- 13 周侗編：『中国墨跡大全』、北京燕山出版社、1994年9月版。
- 14 [宋] 黃庭堅：『黃庭堅書法集』、汕頭大学出版社、2015年11月版。
- 15 黃君編：『黃庭堅書法全集』、江西美術出版社、2012年12月版。
- 16 [清] 鍾應元纂：『乾隆二十年武寧縣志』卷二十七、引自武寧縣志編委會編『明清武寧縣志匯編』、江西人民出版社、2009年版、第295頁。
- 17 水賚佑：『黃庭堅作品考釈六則』、『中国書法』2001年第4期、第21頁。
- 18 陳志平：『黃庭堅書帖考三則』、引自黃君編『黃庭堅研究論文選』第3卷、書法・綜合編、江西教育出版社、2005版、第1570—1583頁。
- 19 李貴：『〈靈源和尚筆語〉受主考』、『勵耘學刊』2018年第二輯、社会科学文献出版社、2018年12月版、第359頁。

- 20 [清] 雛應元纂：『乾隆二十年武寧縣志』卷十七、第236、237頁。
- 21 [宋] 黃庭堅著、鄭永暁整理：『黃庭堅全集輯校編年』上冊、第344頁。
- 22 [宋] 黃庭堅著、鄭永暁整理：『黃庭堅全集輯校編年』中冊、第1238頁。
- 23 [宋] 黃庭堅著、鄭永暁整理：『黃庭堅全集輯校編年』中冊、第1223頁。
- 24 [清] 梁鳴岡編：『乾隆四十七年武寧縣志』卷九、引自武寧縣志編委會編『明清武寧縣志匯編』、江西人民出版社、2009年版、第424頁。
- 25 [宋] 惠洪著、(日) 廓門貫徹註：『註石門文字禪』(下冊)卷二十三、中華書局2012年版、第1384頁。
- 26 [宋] 黃庭堅著、鄭永暁整理：『黃庭堅全集輯校編年』中冊、第1220頁。
- 27 [宋] 黃庭堅著、劉琳·李勇先·王荅貴点校：『黃庭堅全集』第3冊、第1850頁。
- 28 [宋] 靈源惟清：『靈源和尚筆語』、日本寺町藤屋三郎兵衛、(日) 江戸時代(1603—1867) 刻印、第49頁a面。
- 29 [宋] 晁瑩撰：『羅湖野錄』卷一、引自于亭訊註『禪林四書』、湖北辭書出版社、1998年版、第266頁。
- 30 [宋] 晁瑩撰：『羅湖野錄』卷一、第266頁。
- 31 [清] 陳弘緒等撰、段暁華点校：『江域名跡記·江域名跡記統補三種』、江西人民出版社、2015年版、第26頁。
- 32 [宋] 慧南著、堯山僧守素編：『集洪州黃龍山南禪師書尺集』、日本京師寺町松原下田中甚兵衛、(日) 延享元年(1744) 刊印、第2頁b面。
- 33 [宋] 惠洪著、呂有祥校注：『禪林僧寶傳』卷三十、中州古籍出版社、2014年版、第212頁。
- 34 [宋] 晁瑩撰：『羅湖野錄』卷一、第266頁。
- 35 [宋] 黃庭堅著、鄭永暁整理：『黃庭堅全集輯校編年』中冊、第666頁。
- 36 [宋] 黃庭堅著、鄭永暁整理：『黃庭堅全集輯校編年』中冊、第1038頁。
- 37 [宋] 雷庵正受輯、李俊紅点校：『嘉泰普燈錄』卷四、海南出版社、2011年版、第97頁。
- 38 [宋] 祖琇：『僧宝正統傳』卷三、日本統藏經第一輯第二編、中華民國十四年涵芬樓影印、第296頁b面。
- 39 [宋] 晁瑩撰：『羅湖野錄』卷四、第345、346頁。
- 40 [宋] 黃庭堅著、鄭永暁整理：『黃庭堅全集輯校編年』上冊、第482頁。
- 41 [清] 僧慈榮、道林纂：『黃龍崇恩禪院傳燈宗譜』上冊、乾隆二十七年(1762) 黃龍禪寺刻印、第11—15頁。

- 42 [宋] 黄庭堅著、鄭永暁整理：『黄庭堅全集輯校編年』下冊、第1484頁。
- 43 [宋] 黄庭堅著：『宋黄文節公全集・続集』卷二、第1942頁。
- 44 [宋] 黄庭堅著、劉琳・李勇先・王蓉貴点校：『黄庭堅全集』第3冊、第1929—1930頁。
- 45 [宋] 黄庭堅著、鄭永暁整理：『黄庭堅全集輯校編年』上冊、第646頁。
- (編集者注記：脚注19および40は翻訳者による追加)